社会福祉法人ゆたか福祉会広報

ゆたか福祉会キャラクター
ゆたかめくんとみらいちゃん

2022
No.477

障害者のゆたかな未来をめざして 10

「月よりだんご」　ふれあい共同作業所　にこにこたんぽぽ班　※紹介が11ページにあります。

CONTENTS

▶ 工賃向上の課題と向き合って ～実践塾の学びから 10 年～ … P2～3
▶ 鈴木峯保顧問の死を悼む …… P4
▶ 9.10 職員研修開催 …… P5～7

2022年 10月10日 毎月1回10日発行　一部100円（法人会員･賛助会員は会費の中に購読料を含みます）

発行 / 社会福祉法人ゆたか福祉会　〒457-0852　名古屋市南区泉楽通四丁目5番地3
TEL 052-698-7356　FAX 052-698-7358　http://www.yutakahonbu.com/

愛知県ファミリー・
フレンドリー・マーク

ゆたか福祉会　検索

工賃向上の課題と向き合って ― 実践塾の学びから10年 ―

ワークセンター フレンズ星崎　所長　山崎 利浩

新堂さんのこと

3月に新堂薫さんが急逝されました。東京にある武蔵野千川福祉会の常務理事として、就労支援事業所「チャレンジャー」の所長として障害者の就労支援分野の最前線で活躍され、ヤマト福祉財団の第9回小倉昌男賞を受賞されています。フレンズ星崎とはそのヤマト福祉財団が主催する第1期実践塾での塾長と塾生という関係になります。塾修了後もいろいろと気にかけていただき幾度も名古屋までいらっしゃって現場づくりを直接ご教示くださいました。今も感謝の気持ちでいっぱいです。

ふり返るとフレンズ星崎は事業所を形にしていく過程でいくつもの壁に直面してきました。資金づくりや施設整備、組織運営、そして仕事づくりです。私たちはさまざまな人との出会いやつながりに支えられて、それらの課題をなんとか乗り越えてきました。とくに就労支援の実践にあたっては、職員の頑張りや職場の集団性を発揮してもなお、今の姿にはたどり着けてはいなかったと思います。フレンズ星崎にとって新堂さんとの出会いは幸運であり重要な出来事だったと思います。

チャレンジャーを見学して

2002年4月、私は無認可作業所の勤務をへてその作業所づくりを具体化するため、ゆたか福祉会に入職しました。その頃は仲間たちの仕事を確保するのに日々苦労していて、すぐにでも仕事の柱をつくらなければいけない状況でした。ゆたか福祉会ではすでに就労事業としてリサイクル部門や石けんやパンの製造販売が確立していましたが、資金や技術もない当時の私たちにはそうした事業はとても手掛けられません。「私たちにできるものはないか」と仕事のヒントを探して、各地の作業所を見てまわっていました。チャレンジャーを見学したのはそうした2002年の秋のことでした。

当時、東京武蔵野の小規模授産施設チャレンジャーは、すでにダイレクトメールの封入作業で売上2，800万円、平均工賃6万円という実績をあげていて、この分野で注目を集める存在になっていました。新堂さんに案内いただいた作業現場は商店街のなかにあるテナントで、利用者が立ち作業で手際よく封入をこなしていたのが印象的でした。繰り返しの手作業を見ながら「この仕事ならうちの仲間たちもできるのではないか」と思いました。作業はいくつかの機器を使って効率的にすすめられていましたが、大きな機械装置はなく初期投資も少なくてすみそうでした。ここを手本にして「私たちも高工賃をめざそう！」と思いました。いまから20年前のことです。

チャレンジャーをめざして

チャレンジャーを見学したあとの数年間、私は作業所の移転やリフォーム工事、新体系への移行などの課題に対応しました。ニーズによって利用者集団を再編しなおして、高い工賃をめざすグループでは立ち作業や流れ作業も取り入れて、メール作業にかかわる機器もいくつか整備しました。それでもメール作業は思うように受注できず、仕事といえば単価の低い菓子箱折りや軍手の選別作業が中心でした。私たちなりに精一杯やっていたのですが売上も伸び悩み、高工賃の実現の困難さを痛感していました。「チャレンジャーの成功の裏には、きっと他に有利な条件があるのだろう」と思いはじめていました。この時期、全国の研修で新堂さんを見かけることもありましたが、遠い存在すぎて私は挨拶することすらできずにいました。

実践塾に取り組んで

2010年の春、ヤマト福祉財団の主催で利用者工賃5万円をめざす取り組みとして実践塾が開講されることを知りました。あの新堂さんを塾長にしてチャレンジャーの取り組みをモデルにそのノウハウを学びとるゼミ形式の研修でした。新堂さんの話を直接聞けるということで、稲垣副所長と参加することにしました。

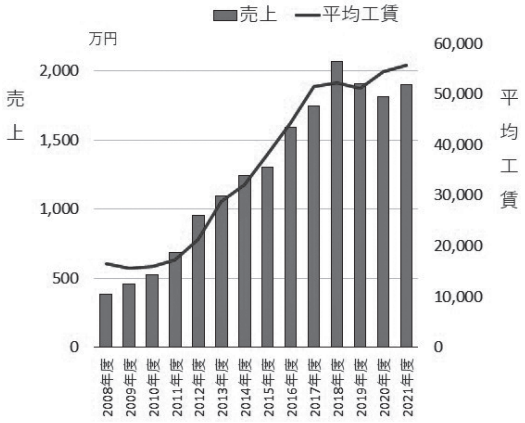
2010年度からおよそ3年間、全国の事業所と就労支援の基本姿勢や作業環境づくりを学びあいました。新堂さんからの具体的なアドバイスと東京学芸大の菅野敦教授の講義もあり、手さぐりだった私たちの試みも意義や方法が深まっていきました。そこで私はチャレンジャーの成果は利用者の力を引き出し高めていく職員の不断のアプローチにあることを知りました。

私たちとチャレンジャーとの違いは経済活動の力量だけでなく、利用者とかかわる職員の支援力の差として受け止めるべきものだったのです。学んだことを職場に持ちかえり副所長を先頭に現場実践の見直しをすすめていきました。営業職員の奮闘もあってメール作業の受注は徐々に増えていきました。利用者の変化は明らかで、仕事をとおした成長や工賃向上によるゆたかな生活の広がりは、そのまま職員の充実感にもつながっていきました。

（＊実践塾の報告は広報No.335、352、374を参照）

ゆたか福祉会のなかで

フレンズ星崎が実践塾を修了して10年が経とうとしています。フレンズ星崎のB型現場は売上が倍になり、平均工賃も5万円を超えるようになりました。10年間で全国のB型事業所の平均工賃は2,000円ほどしか上昇していないのに比べて、ゆたか福祉会のB型事業所の平均工賃は13,000円も向上しました。私は実践塾の取り組みがフレンズ星崎にとどまらず、他の現場にも伝わっていったあらわれだとも思っています。



ゆたか福祉会のリサイクル部門では、70名の障害のある仲間たちが働き、6万円を超える工賃の支給を実現してきています。この大きな実績を前に職員のなかには「高工賃は官公需の枠組みや大規模設備がなければ実現できない」という考えにとらわれるものもいて、私は気になっていました。他部門の低工賃の言い訳のようにも聞こえるからです。工賃向上の取り組みにおいて経済活動の条件づくりはもちろん重要ですが、それで済むものではありません。利用者の働く力をいかに引き出すか、彼らの力を高める職員の支援力こそ試されている！新堂さんの実践はそのことを示していました。

新堂さんへ

フレンズ星崎の仕事づくりはチャレンジャーへの憧れが出発点になっています。新堂さんが具体的に手本を示してくれたこと、直接ご指南をいただけたことで、私たちの実践は大きく前進しました。こうしたことが、かけがえのないことだったと今改めて思います。フレンズ星崎のB型現場の売上や平均工賃は、20年前のチャレンジャーにまだ届いていません。数字だけでなく実践もまだその背中を追いかけています。新堂さんが示してこられた実践をフレンズ星崎だけでなく、さらに広く位置づくように引き続き私たちなりに取り組んでいきたいと思います。

鈴木峯保顧問の死を悼む

理事長　鈴木清覺

読者の皆さんには、残念で無念な報告をしなければなりません。

ゆたか福祉会の事業創設の中心になった鈴木峯保顧問が9月11日に亡くなりました。満79歳3か月の人生でした。峯保さんは長崎県平戸の出身で、9人兄弟の8番目に生まれ、幼少期には経済的にも苦労されながら育ちました。中学校卒業と同時に、集団就職で名古屋に来られ、米屋さんに就職され、社会人として働き始められました。その一方で夜間高校に通い、卒業後は当時札中に在った日本福祉大学二部（夜間部）で福祉の勉強に励まれました。

大学卒業後は、障害者のはたらく場として設立された「名古屋グッドウイル工場」の最初の指導員として就職し、仕事を開始しました。それは公的な補助も制度もなかった時代、親・家族、特殊学級（障害児学級）関係者らの「卒業後の障害者の働く場づくりの願い」に応え、資金も保障もない中での出発でした。

企業の一角を借りて始まったこの事業は、翌年に親会社が倒産し、一夜にして働く場を失くしますが、親・家族やなかまのみなさんと力を合わせ、運動に立ち上がることになります。合言葉は「柱1本、石ころ一つでも持ち寄って自分たちの工場をつくろう」でした。名古屋中小企業家同友会などの支援を受け、倒産からわずか1か月後、日本で最初の「ゆたか共同作業所」を設立し、今日のゆたか福祉会の事業の基礎を築かれました。

ゆたか福祉会は1972年に法人認可を受けますが、この認可運動を中心になり推進され、認可となった「ゆたか作業所」をはじめ、3番目の作業所である「なるみ作業所」、最初の生活施設である「ゆたか希望の家」の初代所長として、それぞれ事業を軌道に乗せるために貢献されました。

更に専務理事、副理事長として、ゆたか福祉会の歴史的大事業となった設楽福祉村「キラリンとーぷ」の建設のために、中心となって努力されました。法人運営と確立のために力を尽くされ、まさにゆたか福祉会とともに、その歴史を担ってこられました。

同時に峯保さんは、地元（知立市）での障害者の作業所づくりや法人の設立に努力されました。またゆたか福祉会退職後は、娘さんと共に高齢者福祉事業のNPO法人「和」を設立され、理事長として地域福祉の発展と充実のために活躍されました。

峯保さんの生涯をふりかえると、様々な困難に挑戦し「苦労の人」として明るく前向きに生きた生涯であったと思います。ゆたか福祉会を代表して心からの感謝を捧げます。ありがとうございました。

弔電の文面

峯保さん、こんなに早くお別れが来るとは思いませんでした。残念です。

峯保さんは、ゆたか福祉会の職員第一号として、事業・法人の創設に尽力され、その礎をつくり発展に貢献されました。

その生涯をゆたか福祉会とともにあったことに、心からの感謝とお礼を申し上げます。

社会福祉法人ゆたか福祉会
理事長　鈴木清覺

鈴木峯保さんを偲ぶ会のご案内

日時
2022年12月18日(日)
13時30分～15時

会場
名古屋国際会議場 431・432

お問合せ先
ゆたか福祉会法人本部

9.10 職員研修 オンラインで開催！

今年度2回目となる全体研修はオンラインで開催し、約30ヶ所の事業所と個人から160名余の参加がありました。

午前中は今年度、ゆたか福祉会事業計画に基づく重点課題の「地域生活支援拠点事業まーぶる」と、福祉村の施設統合に向けた建物整備について報告が行われました。

午後は「障害者家族の抱えた実態から考える」をテーマに、外部講師もお招きし、より広い視野で現状を知り、今後の課題について考える機会としました。

〈 午前企画 〉

地域生活支援拠点事業所「まーぶる」からの報告

この事業は、まーぶるホーム（入居定員18名、内1名体験入所）、短期入所まーぶる（利用定数2名、内1名緊急短期入所）、お助けショート・お試しグループホームとしての機能があります。

現在の入居者の現状は、グループハウスなぐらから8名、グループホームエールより1名が3階のフロアーで生活をしています。また日中活動では、ゆたか作業所、みのり共同作業所、みらいろ、デイサービス宝南を利用されています。

当初は引越し後の生活条件整備が中心で、新たな職員との関係づくりなど、落ち着かない状況がありました。現在は落ち着いてきており、職員も仲間たちの特徴をつかみながら支援が出来るようになりました。

ヘルパーの利用は、人員がまだ十分に確保出来ていないこともあり、通院や買物外出などの取り組みは今後の課題です。日中支援にライフサポートのヘルパーが複数入っていることもあり、体制が整えば関係づくりが出来たヘルパーとの外出などを行っていきたいです。

医療連携については、正看護師1名を配置しています。訪問診療を積極的に活用し、月1回の定期往診と週1回の歯科往診を受けています。薬は各個人別の管理を薬局に委託しています。

今後の受け入れについては、グループハウスなぐらと地域で生活をしている方の計8名を予定しています。

ゆたか生活支援事業所みなみ　横井 里美

日中活動受入れ事業所からの報告

●ゆたか作業所「笑顔が引き出せるように」

4月より男性の仲間が4名利用されています。お一人はにぎわい現場で、CDの解体を中心に仕事をされ、他の3名の方はデイ現場で活動されています。

コミュニケーションが難しい方も多いですが、「好きな事・心地よい事は何かな？」と探りながら、少しずつ笑顔が引き出せるようになってきています。

稲垣 静佳

●みのり共同作業所「帰ってきた作業所で」

淳也さんは、20年ぶりに作業が日課の柱となるみのりに帰ってきました。当初は戸惑いが多い様子でしたが、早い段階からご家族ともコンタクトをとり、意向や助言等を頂く中で、今では週3日みのりで過ごされています。

普段はおしゃべりが止まらない淳也さんも、銅線の剥離作業では自信をつけ、黙々と作業をする姿が見られています。

堀田 淳子

●みらいろ「たいこだいすき！」

4月25日より、新たに3人の仲間を迎え入れ「さくら班」を立ち上げました。初めは仲間も職員も緊張した様子がみられましたが、今では創作・ダンス・魚釣り・園芸・足浴など、15種類の取り組みを楽しんでいらっしゃいます。中でも音楽に合わせて叩く太鼓が「一番好き」と言ってくれます。

これからも仲間に楽しんでもらえる取り組みを模索し、笑顔溢れる「さくら班」を目指します。

大峯 穂乃海

福祉村将来構想の進捗状況

福祉村将来構想は「希望者が福祉村からグループホームまーぶるへスムーズに移行する」「福祉村の2つの入所施設の統合に向けた準備をする」「移行により空くグループハウスなぐらの建物の活用も含めた地域交流について」この大きく3つの検討を進めています。

まーぶるへの移行については、2021年度にご家族に説明会や見学会を開催したり、利用者本人が「グループホームエール」で体験利用をしたりと、それぞれが将来の生活の場を選択できるよう取り組みを行ってきました。

2022年4月には8名の方がまーぶるへ移行されました。当初は9月にあと4名の方が移行する予定でしたが、職員体制の不足により2023年4月に移行時期をずらすことになりました。

統合に向けた準備では、2023年4月の第2ゆたか希望の家への統合に向け、受け入れのための建物建設や統合後の運営について、日課・職員体制などの検討を進めています。工事については、土地造成や建築とも入札や契約、地鎮祭も終わり順調に進んでいます。統合後の運営面でも職員の体験交流や、合同職員会議におけるグループワークなど、職員間の交流等も含め行っています。

地域交流の取り組みについては、受託している生活支援コーディネーターの活動としても、地元名倉地区での協議体の設置運営を通して地域課題と向き合い、行政や地元団体と連携する中で、今後の活動について検討を進めています。

福祉村事業本部長　荒川 元仁

日本へようこそ　職員紹介

●グループハウスなぐら

お二人からのメッセージ
「Xin chao! Tu bay gio Rat mong nhan duoc su giup do」
こんにちは！
これからおねがいします

（左）キエウ・キム・アインさん
趣味　歌
特技　農業（職員寮の裏にも畑を作ってもらい野菜の栽培を行っています）
好きな食べ物
　ソーセージ、フルーツ（ぶどう、ドリアン）
やってみたいこと
　北海道に行ってみたい

（右）ファム・ティ・ハイ・イエンさん
趣味　ランニング
特技　料理
好きな食べ物　焼肉
やってみたいこと　富士山に登ってみたい

●まーぶる　～長いお付き合いになれますように～

事業所みなみでは、7月にベトナムからの留学（制度）で日本へ来られたトゥイさんとフォンさんが、職員として仲間の支援に入っています。主に食事の準備や洗濯、日中活動に関わってもらっています。

お二人は午前中にまーぶるで仕事をして、午後からは日本語学校へ通われています。とても仕事に対してまじめで、わからないことはすぐに質問をされ、仲間の「コーヒーが飲みたい！」「絵描いて！」などの声にもすぐに対応されています。

ゆたか生活支援事業所みなみ　横井 里美

グエン・ティ・タイン・トゥイさん（左）
日本語は難しいですが、勉強と仕事を一生懸命に頑張ります。
ゴ・ティ・フォンさん（右）
まーぶるの仲間の笑顔が大好きです。

〈 午後企画 〉

講演要旨

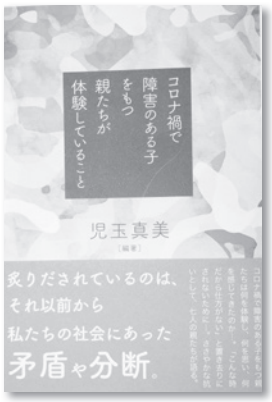
午後はコロナ禍において、より深刻化している家族介護の問題について、現在の状況や、抱えている課題等について、お二人の方にご報告いただき学びあいました。

講演1

「コロナ禍で障害のある子をもつ親たちが体験していること」

日本ケアラー連盟代表理事の児玉真美さんより「コロナ禍で障害のある子をもつ親たちが体験していること」と題して、コロナ禍の障害者家族の実態や、日本の家族介護の問題についてお話をして頂きました。

児玉さんのお話の中で印象的だったのが「コロナ禍で炙り出されたのは、平時からの医療と福祉の家族依存の問題」という発言でした。



コロナ禍の厳しい現状においても、「家族だからやって当たり前」という、社会からの風潮があること、また家族介護の問題は社会からより見えにくくなっているということです。これら障害者福祉制度における家族依存の問題は、コロナ禍前からずっとあり、何ら解消されず放置されて来たことが、今日のコロナ禍の家族介護問題の大きな要因だということです。

児玉さんの発言の中で、親だから子の介護をずっと死ぬまでするのが当たり前ではなく、「親も固有の人生の物語の中で、かけがえのない関係性を生きることが大切」という言葉が強く印象に残りました。そのためには、どのような制度や社会資源やサポートが必要なのか考える必要を改めて感じました。

講演2

「このままではいけない～みんなで『助けて！』と言おう!!」

ゆたか福祉会の利用者の親でもある浅野美子さんから、「このままではいけない～みんなで『助けて！』と言おう!!」と題してお話がありました。代表を務めるよかネットあいちが実施した「コロナ禍の家族の実態調査」をもとに、家族が抱えているリアルな現状が報告され、「もっと行政や国に対して伝え、声に出すことの重要性」を切に訴えられました。

コロナ禍は私たち障害福祉現場に、様々な課題を山積みにしていること、また起きている課題や問題から、改めて社会の脆弱性が浮き彫りになりました。

障害者運動の歴史は、「声なき声」を社会に訴え広げてきたことが、社会問題となり、社会を動かしてきた歴史でもあります。今回の研修会を通じ、改めて今後取り組んでいく課題が指し示されたように思います。

ライフサポートゆたか
今治 信一郎

職員研修を終えて

8月から9月にかけた第7波のコロナ感染症の拡大は、当法人の事業運営においても様々な影響をもたらしました。職員研修に向けた準備もそのひとつで、様々な制限がある中、ギリギリまで準備をして頂いた皆さんは大変だったことと思います。心から感謝申し上げます。

午前中の報告ではたくさんの映像が流れました。事業所間の訪問や活動が制限される中、久しぶりに見る仲間たちの笑顔は、私たちの気持ちを明るくさせるものでした。まーぶるからみらいろに通われる仲間のはちきれんばかりの笑顔や、試行錯誤しながらの取り組みの数々は、日中活動事業所の職員に大きな刺激になりました。

またベトナムからの人材確保については、直接ご本人からの挨拶や「真面目でひとり一人の利用者に丁寧に関わって頂いている」という報告がありました。「トゥイさんとフォンさんの声が聴けて良かった。一度関わってみたい」「色々なハードルもあると思うが、それぞれ寄り添って互いに成長できるような組織づくりを福祉会全体で実践していきたい」という声が聞かれました。

文責　研修部長　向 幸子

リサイクル港作業所

リニューアル工事が完成しました！

所長 萩原 千秋

久しぶりに作業所に訪ねてこられた家族の方が思わず声にされました。「うわぁ！きれいになったね。港作業所じゃないみたい！」

リサイクル港作業所は、SDGsの先駆けともいえる環境問題（地球を守る）に障害者が携わる作業所です。1994年4月に開所し、名古屋市港資源選別センター内で「空きびんと空き缶の選別作業」を委託事業で行い、今年で28年目を迎えました。

工場の機械設備は"待ったなし"で修繕してきましたが、近年管理棟の傷みが目立つようになりました。今から4年前の2018年、名古屋市に事業の移転計画がない事を確認し、障害者福祉サービス事業継続の為に、改装の必要性を説明。了解を得て、今年度内装工事に着手しました。

工事期間は5月30日から8月10日迄の73日間。作業所運営しながら土日限定の工事もある中で、休みなくあっという間に終わった気がします。竣工検査を8月26日に終え、事故もなく見事に生まれ変わったことに感謝の一言です。

利用者に使いやすく、掃除のしやすさに配慮

大きな変更は

＊内装（天井・床・壁）の張り替えと、トイレの床を塩ビシートに

＊トイレの入り口と個室の扉を押し戸から引き戸に

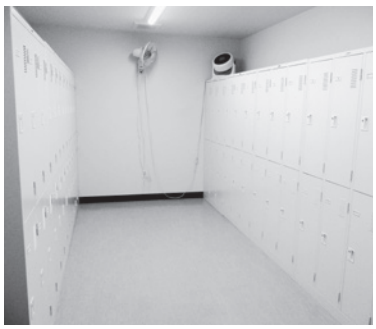
＊更衣室のシャワールームを更衣室として活用

＊身障トイレの一部をシャワールームに

の4つでした。

更衣室とトイレのリニューアル ～工事は2階から～

更衣室は使用されていなかったシャワールームを撤去。男子更衣室はコロナ対策で5人制の入れ替わりとしていましたが、倍の人数でも可能な程の余裕ができました。その日のうちに利用者が椅子を運び、居場所づくりが始まり、スマホでゲームやYouTubeを見る第二休憩室になりました。



広くなった男子更衣室

更衣室内には昇降可能な手洗い場を設置。車椅子の方からは「ここまでやってもらったら、頑張らなあかんね」と好評です。着替えの際の立ち上がり用の手すりの希望がありましたので、追加工事を行いました。

改修期間中は隣の休憩室を間仕切りし、仮設男女更衣室を設置しました。休憩室がなくなり心配しましたが、昼休憩に塗り絵をする方はロビーの机といすが指定席になるなど、それぞれに工夫して過ごされました。

立ち上がり用の手すり

休憩室はカーペットを塩ビシートに変更。掃除をしてもガラス片が残るという悩みを解消することができました。更衣室近くの廊下の歯みがき用流しは、コロナ衛生対策で歯磨きコップ置き場を撤去し、すっきりしました。今は更衣室ロッカー内に入れていただいています。

トイレは、区画はそのままで便器配置等を工夫しました。洋式トイレの個室の扉を押し戸から引き戸に変更したので入退室が楽になりました。また便座からの立ち上がり時に、目前の壁との距離が以前より広くなり、圧迫感がなくなりました。

タイル床を塩ビに変更し、壁と個室の木製の傷んでいた仕切りも水

拭きできるようになりました。身障トイレは電気温水器シャワーを取り付け、冬でも安心です。トイレ前廊下には小さな倉庫を作り、掃除道具を収納できるようにしました。

食堂は返却口の扉を撤去し、シャッターを取り付けました。これまで扉上の壁で背の高い方が頭を打っていたので、「打たなくなった」と好評です。天井まですっきりしました。

机と椅子を新調し、入口付近に昇降机と介護机（ヘリが曲線）を設置しました。「使いやすいです」と車いす利用の方からの声がありました。椅子座面は布ブラインドと同じ緑色でコーディネートしました。

食堂返却口の扉撤去し
シャッターに変更

事務所入り口に通路確保

1階は統一感ですっきり
～細やかな配慮をしながら～

1階の事務所とその奥の相談室は、机の配置を見直し動線を確保しました。また什器の高さを揃え、火災受信機が遠くからでも見えるようにし、事務所奥の事務員席から入口までの直線に物がなく、車いすもゆとりをもって通ることが出来るようになりました。事務所受付小窓付近にはパーテーションを設置し、職員机のパソコン画面が小窓から見えないようにしました。

相談室は、所長・副所長の部屋です。向かい合わせの机を分離し、入口横に副所長机と支援員からの報告相談用カウンターを設置しました。またカーペット床を塩ビシートに替えたことにより、事務所・相談室・医務室の統一感が深まりました。

事務所と相談室の外側が資源貯留場で埃が舞うので、コロナ以前は窓を開けることはほとんどなかったのですが、換気対策として全てに網戸を取り付けました。

医務室は、コロナ対策で職員用給食室として活用しています。壁紙も新調したので、サービス担当者会議やオンライン会議に活用する際、気持ちよく臨むことができます。

環境局の方も立ち寄られる1階男子トイレは、小便器を2据から3据に、洋便器を1据から2据に増設しました。身障トイレはユニット式シャワーを取り付け、トイレ呼び出しコールをすべての個室に設置しました。

工場階段は初め計画にはなかったのですが、LED照明に交換しました。器具の追加を行い、手すりが片側設置であったので反対側にも設置しました。この階段は、津波災害時に避難場所である屋上に昇る階段ですので、訓練の度に階段が暗く怖がっていた利用者も安心して昇降できそうです。非常用照明もLEDに新調しました。

綺麗は快適
～気持ちよく働ける職場に～

コンクリート壁を壊す時の音が想像以上に大きく、電話の声も聞こえないほどで驚きましたが、連日の猛暑でも熱心に作業を続け、期日に間に合わせる建築業者の技術に脱帽です。天井裏と床下の配管等、見えない部分に技術が埋まっていました。終業後の片づけも見事でした。「仕事は段取りが命」と勉強になりました。

什器の廃棄は、鉄製品はリサイクル港作業所の再資源業者にお願いしました。分解し運搬するのは重労働でしたが、処分経費が安くなり、資源化にもつながりました。監督さんにも手伝っていただき、職員一同で力を合わせ、充実感がありました。

これまでうす暗かった作業所が一変し明るくなり、什器を新調し、統一感につながりました。改修後は壊れたままや見過ごしてきた所に目が届くようになりました。利用者から「せっかくやったのに、もう汚した人がいる」と声が挙がります。誰にとっても「綺麗は快適」であり、見た目は大事です。利用者に選んでいただけるような作業所であるように、整理整頓や掃除を行い、何より職員が気持ちよく支援できる環境づくりを目指したいと思います。

成年後見もやいの取り組みの現状と課題 その1

特定非営利活動法人成年後見もやい　理事　塚本 道夫

広報誌では2021年1月号から12月号まで、「障害者の『親なきあと』問題と成年後見制度」と題して連載を行いました。あれから9ヶ月、高齢期を迎えた利用者、親・家族の安心できる暮らしへのサポートは、より一層、身近なものとなっています。

今回は2回にわたり、改めて成年後見もやい（以下「もやい」）の取り組みを通して見えてきたこと、課題について報告をして頂きます。

■もやいの受任状況と親族の状況

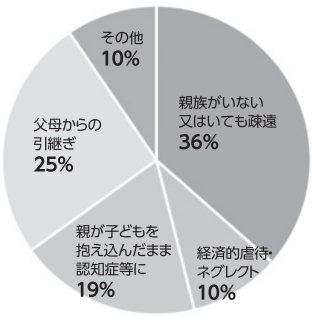
名古屋家庭裁判所から累計で71件の後見人等の受任をし、すでにお亡くなりになった方などを除くと、2022年8月末現在で、63人の後見等事務を行っています。利用者（以下「本人」）の内訳は、図表1にあるように、後見類型49人、保佐類型14人であり、"生活の場"別としては、グループホーム41人、施設・病院（おもに障害者支援施設）16人、在宅（多くは、一人暮らし）6人となっています。もやいの特徴として、知的障害者、精神障害者の利用が9割を超えています。

図表1　受任状況(2022年8月)

	在宅	GH	施設	病院	計
後見	4	31	13	1	49
保佐	2	10	2	0	14
補助	0	0	0	0	0
計	6	41	15	1	63

図表2は、本人の親族の状況を分類したものです。親族がいない又はいても疎遠な事例が36％、経済的虐待・ネグレクトの事例が10％、親が子どもを抱え込んだまま認知症等になった事例が19％となっています。父母が元気なうちにもやいが父母から引き継いだ事例は25％となっています。

図表2　本人の親族の状況



高齢期を迎えた親が、他の親族や第三者にわが子の権利擁護をどの時点で引き継ごうと不安を感じながらもわが子を抱え込んだ生活を継続し、結果として、両親死亡後の受任、老障介護の状態となってからの受任、さらには、親が子どもを抱え込んだまま認知症になってしまうという深刻な認障介護の状態となってからの受任などが相当数あり、父母が元気なうちに引き継いだのは4分の1にすぎません。難しい問題ではありますが、親が元気なうちに引き継ぎができるよう、支援関係者の取り組みや地域連携ネットワークに期待しています。

経済的虐待・ネグレクトの事例や親が子どもを抱え込んだまま認知症等になった事例には、本人に「身寄りがない」又は「本人に身寄りがあっても疎遠」の状態であるものが相当数含まれています。

したがって、本人が死亡すると、原則的には後見等の事務が終了しますが、もやいが支援者等と協力し合って葬儀等を行わざるを得ない事例が半数程度あると思います。高齢化や核家族化の進行でますますこの傾向は高まっていくと思われます。

また、20人（32％）の方が、低収入・低貯蓄者又は生活保護受給者であり、後見人等への報酬助成制度を利用しています。

正職員募集　高齢者、障害者の権利保障をめざします。

募集内容　来年3月大学卒業予定者及び既卒者
資　格　社会福祉士 又は 社会福祉士国家試験受験資格者
給　与　当法人規定による。(地方公務員並み)
休　日　週休2日(土日)、年末年始、有給休暇
応　募　履歴書・職務履歴書を郵送してください
書類選考の上、面接実施

特定非営利活動法人
成年後見もやい
〒456-0031
名古屋市熱田区
神宮二丁目3番4号もやいビル
☎ 052-746-9395

一般寄附（7・8月）

伊藤　澄子……村井智恵子……新城　照美
株式会社大谷商会　代表取締役　大谷祐介

※利用者・保護者・職員の皆さんからも多くのご寄附をいただきました。

賛助会員新規加入者・更新者ご芳名一覧

（7月18日～9月16日手続き分）　順不同 敬称略

江坂　文恵
若尾　文子
今西　正次
浅野実千代
前田　勝彦
小野寺由里子
千葉　恵子
岩山　芳美
中山葉子美
金桶貴美代

坂野　敦之
神村　孝子
山崎　恭裕
及川　博子
水谷　暎子
柳川　将義
・オリエ
岩本　榮子
岡下　豊子
村田　昌史

當間　弘子
村井智恵子
藤田　秋雄
藤田　明美
加藤　信子
太田　祐周
渡邉　紘三
渡邉喜和枝
新城　紘行
新城　照美

片山美恵子
阪田　正子
桜軽金属工業㈱
日鉄物産株式会社
有限会社
岩本工務店
東海ニチユ㈱
壽工業㈱
大橋昭人事務所
大橋昭人

ありがとうございました

日誌　8月

2日（火）　共同墓地「盆供養祭」
3日（水）　2021主任フォローアップ研修
4日（木）　作業改善ゼミ
8日（月）　事業運営推進会議
9日（火）　ウクライナ支援
ゆたか福祉会関係者の集い
18日（木）　事務事業推進委員会
19日（金）　新所長研修
23日（火）　広報・ホームページ編集委員会
24日（水）　所長会議
27日（土）　理事会・運営協議会
29日（月）　強度行動障害者支援者
養成講座（実践）～30日 /
研修部会議
30日（火）　大学生協東海ブロック
夏季インターシップ

表紙の作者紹介　「月よりだんご」　ふれあい共同作業所　にこにこたんぽぽ班

「にこにこたんぽぽ班」は、それぞれのペースで仕事もしながら、若かりし頃に経験出来なかったことや、やってみたいことも含めて『青春のやり直し』をテーマに活動しています。

季節を感じられるよう毎月、季節に合った創作を行い、9月はお月見をテーマに取り組みました。「月は何色にしようか？」「背景は何色にしようか？」「うさぎはもっと大きい方がいい」など、仲間たちが考えながらつくっていきました。

手先が器用な仲間が多く、細かいところまで丁寧に作ることができ、配色も仲間のセンスが光ります。いつも「まあ、ええわ」と言う仲間も少し参加できたり、作品をみて「きれいだね」と言ったり、それぞれがそれぞれの感じ方で楽しむことができました。

広報・477号

2022年10月号（2022年10月10日発行）
定価1部100円
法人協力会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます

発行・編集 ／ 社会福祉法人ゆたか福祉会
印　　刷 ／ 株式会社東海共同印刷

法人協力会費・賛助会費・寄附金など福祉会への申し込み、ご送金は

法人協力会費 ＝ 年間1口6,000円、
賛助会員（個人1口3,000円、企業団体等1口5,000円）

●銀行口座　名義はいずれも社会福祉法人ゆたか福祉会

・三菱UFJ銀行　柴田支店　普通預金 291-884
・中京銀行　鳴海支店　普通預金 150-425

●郵便振替口座　00820-8-54026 社会福祉法人ゆたか福祉会

仲間

「コロナ禍でも理想のくらしをめざして自分にできることを」

みのり共同作業所 **堀田 八千代さん**

堀田さんは現在62歳。2020年3月からみのり共同作業所の利用を開始されました。リサイクルみなみ作業所に長らく在籍し活躍されていましたが、60歳という節目を機に「新しい生活の仕方を考えていきたい」との思いからでした。そして暮らしの場である「エール」から近い、みのり共同作業所を新たな日中生活の場として選択し、現在に至るまで、毎日元気に通所されています。

仕事は工業用ウエス作成を主とする「ウエスワークス班」に在籍し、布のたたみや重ねといった工程に取り組み、日々奮闘されています。「自分のペースに合った作業と、充実した余暇や活動を楽しむ」といったニーズをお持ちですが、コロナの影響もあり、十分に達成できていない状況です。「コロナが終わったら○○をしたい！」「○○に行きたい！」といった、ささやかな目標を胸に抱きつつ、作業に取り組む毎日です。

昨年より電動車いすを操作して通所され、行動範囲が広がってきています。ご自身の望む生活の在り方へ向かって、一歩一歩進んでいる堀田さん。職員一同、協力しながらその一助を担っていけたらと思います。

佐竹 郁哉

職員

「自称、ゆたか1恵まれし職員」

つゆはし作業所 **石田 和久**

高卒で福祉のことは無知、ゆたかの歴史も知らず2010年1月にパートとして入職。2011年4月に正規採用となり、辞令を受け取る間もなく、東日本大震災被災地支援に始まったゆたかでの職歴も12年。大好きなバスケアニメ「スラムダンク」の主題歌を聴きながら振り返ると、私ほど恵まれている職員は他にいないのではと思います。

一番の理由は「環境」です。現在3施設目になりますが、12年間清掃事業をしています。この間、先輩から教わったことを土台に清掃見学・実習などを経験し「人」との繋がりを築くことができました。

そして悩み苦しんだときに言葉で勇気をくれた先輩。2010年以前になるみ作業所で一緒に働き、再び戻ったときに「おかえりなさい」と迎えくれた先輩。自分が勝手に好敵手をつくり、勝手に切磋琢磨した同僚。本当に「人」に恵まれた環境で過ごしてきました。

高卒・福祉は無知。勢いで過ごせる期間は限られます。当然勉強も必要です。そんな私の勉強する場が「きょうされん」です。支部事務局員・事業委員として情勢など学ぶ機会が多くあります。今年6月からは荒彫塾に8期生として参加しています。推薦をいただき参加を決意したときに「ゆたか1恵まれし職員」を名乗ろうと決めました。

これからの私の主題は「恩返しと恩送り」

スラムダンク主題歌で一番元気になるのが、MAN-SHの「煌めく瞬間に捕われて」です！

現場利用者と貴重なツーショット